

暗黒学校

上

僕たちの中で、その日は「追放の日」と呼ばれた。そう言おうとみんなに触れまわっていたのは、サクダ。地球という樂園から追放されたから、そう呼ぶことになったらしい。何人かはその呼び名を使っていた。「追放」という言葉がわかりやすかったからではない。とりあえず名前は必要だったから、最初に作られた表現が広まっただけだ。どこから、なぜ、誰が追放されたかなんて。聞かれたって、答えられっこない。

《登場人物》

ユウタ
しをり
テツロー
委員長
モネ
マオ
アサミ
サク
ゴリ
ヒヨロ
ヨウコ
マサル
フツくん

石嶺雄太
桐生しをり
西田哲郎
武田誠
鈴木美音
田中真央
国井麻美
雨宮佐久
大山卓也
高原比呂
高槻洋子
木島勝
福田一樹

平民
異邦人
探偵
大統領
芸術家
呪術師
美人
神官
戦士
資本家
犠牲者
犠牲者
犠牲者

■♂■ 東棟三階・男子トイレ

僕が目覚めたのは、トイレの中だった。

なんだか頬がやけに冷たい。顔面に硬いものが当たっている。妙に薄暗いぞ。ハツと身を起こす。

トイレのタイルだ。僕は男子トイレの床に突っ伏していたのだ。汚い。体についた埃をはたき落とす。頬を触ると、タイルのあとらしき溝がついているのがわかった。

あたりを見回してみる。

何で僕は学校のトイレの床に寝ていたんだろう。記憶にもやがかかったようで、思い出せない。頭が混乱する。

トイレの蛍光灯は消えている。非常灯のぼんやりとした光だけが見える。何だかやけに静かだ。

どういうことだろう。頭の中が混乱する。ひよっとして、授業が終わった後、家へ帰らずにトイレで寝てしまったのか？ そんなアホなことがあり得るだろうか。ええと、今何時だろう。僕は携帯を取り出して開いた。

「 10月 13日 土曜日 14:59 」

えっ。

土曜日。

えっと……

そうだ。混乱していた記憶が整理されていく。

翌月に迫る文化祭。だけど、まだうちのクラスでは何をやるか全く決まっていなかった。なので委員長呼びかけで、その相談を土曜日にする事になったのだ。午後一時頃に有志が集まって、めいめい持参した飲み物やお菓子を広げながら、教室で議論をした。話し合いは長引いた。お化け屋敷だとか喫茶店だとか色んなアイデアが出て、なかなかまとまらない。

場が煮詰まってきたところで、委員長が十五分の休憩キョウケイを取ることに決めた。何人かで外に出て行くやつもいれば、ジュースのおかわりを買っていくやつもいた。僕はトイレに行きたくなったので、

席を外して東側の男子トイレに向かい、中に入って……

そこから、記憶がない。

すべってころんで、そのまま気絶でもしてたのか？

かつこわるい。

早く戻らないと、みんなきつと心配してるぞ。僕はもう一度服についた埃ほじりを落とすと、トイレの出口に向かつて歩き出した。

待てよ。

もう一度携帯電話を開いてみる。

「 10月 13日 土曜日 15:02 」

15:02?

ちよっと待てよ。何でこんなに暗いんだ。まるで夜じゃないか。そもそも電気がついていないのはなぜ？ トイレに入った時はついてたはず。誰かがスイッチを切ったのか、それとも停電か。それにしたってこの暗さは……

僕はそこでぞっとする。

窓。

トイレの窓の向こう側が真っ暗なのだ。まるで地下鉄の窓のよう。日が沈んでいるわけがない。だってまだ三時だぞ。おそろおそろ近づいてみる。何とも不気味な暗さだった。星が出ているわけでもなく、月が出ているわけでもない。校庭に植えられている木のシルエツトも見えない。絵の具で隙間なく塗りつぶしたように、暗黒なのだ。何もかも飲み込むような底なしの暗さ……

窓のすぐ手前まで来て、僕は外に向かつてゆっくりと手を伸ばす。

窓は開いていて、鍵もかかかっていない。向こう側に黒い色のガスでも充滿しているのだろうか。黒いガス……煙。外で火事が起きている？ だとしたら窓の向こうから熱気が流れ込んで、火傷してしまうかもしれない。手にはススがつくだろう。それとも携帯電話が故障しているだけで、本当に夜なのかもしれない。だとしたら夜の冷気が手に触れるはず……。さあ、窓の向こう側は。予想に反して、硬くざらりとした手触りがそこに感じられた。

「うえっ」

思わず手を引っ込める。冗談だろ。

窓の外にあったのは、黒い壁だった。

向こう側に硬いものが詰まっている。岩のような、コンクリートのような……重々しく、押しても引いてもびくともしないような何かがそこにある。触っただけでは壁の厚みはわからないが、壁

はどこまでも果てしなく続いているような印象があった。

わけがわからない。外の世界が全部セメントで固められているとでも言うのか？ 一体何のために。閉じ込められた？ いや、そんなことが起きるわけがない。でも、嫌な想像が頭を駆け巡る。

顔面から血の気が引いて行くのがわかる。静かなトイレの中、自分の心臓の音だけが大きく響きわたる。何だよこれ。静かすぎるだろ。水が流れる音も、風がそよぐ音も聞こえない。どんな静かな夜でも、何かの音はある。かすかな衣擦れの音や、どこかで車が通る音……。だけど今は何の音もない。僕の心臓の音だけだ。この世界に、僕の心臓だけが存在しているような……

背中に冷たいものが走る。

何だかわからないが、何かがおかしい。蛍光灯とお日様が照らす、そんな男子トイレに僕はいたはずなのに。白い小便器が五つ、個室が三つ。一番端には掃除用具入れ。それだけの何気ない、シンプルな空間だったはずなのに。突然恐ろしい不気味な世界に変わってしまったように思える。

とにかくここから離れたほうがいい。状況はわからないけど、ここは危険だ。僕は出口の方に振り返ると、小走りで廊下へと駆けだした。足音がやけに大きく響く。

入り口近くの洗面所の鏡が、粉々に砕けて床に散らばっている。踏みつけると、ガラスの割れる音がした。

深く考えないこととして走った。

廊下の蛍光灯も消えていた。非常灯がぼんやりと照らす廊下を駆ける。本当に暗い。廊下の窓はどれも真っ黒に塗りつぶされている。中にはいくつか割れている窓もあったが、その外側も例外なく暗黒だった。あれは全部黒い壁に変わってしまったのだろうか。もしそうだとすれば、この校舎全体が黒い壁に包囲されていることになる。

出られなくなつた？ そんなばかな。

みんなはどうしているだろう。

まさか僕一人だけが、学校に閉じ込められているとしたらどうしよう。僕だけが、変な世界にワープしてしまっていたら。怖い。恐ろしい。

三組の教室が見えてきた。逸る気持ちを抑えながら、ドアを開く。

何かの心配がした。

教室の中もまた、暗かった。窓の向こう側がやはり黒く変色している。闇の中、いくつかの影が並んでいるのがわかる。影は、僕がドアを開いた音に驚いてビクッと反応したようだった。その影を目をこらして見つめる。

学生服の影、セーラー服の影……

ほっとして、思わず目がうるむ。みんなだ。クラスメイトのみんながそこにいる。

「ユウタか？」

一人の影が、僕の名を呼んだ。親友のテツローだ。その長身と、お洒落な天然パーマが暗い中でもはつきりわかる。

「テツロー」

「ユウタ、無事だったのか。よかった。どうしてたか心配だったぜ」

「テツロー……」

テツローの声。その声が凄く懐かしく感じられた。よかった。よかった。テツローがいた。みんながいた。

テツローは僕のそばまで来ると、ポンポンと肩を叩く。爽やかに笑いながらも、その表情には緊迫したものが感じられた。

テツローはそれ以上、何も言わない。いつも明るくて快活なテツローが押し黙っている。

僕は教室に漂う異様な気配に気がついた。

すすり泣き。そして沈黙。みんなは教室の前半分に集まっていて、憔悴した表情をしている。人数も少ないようだ。机は散乱している。ひっくり返った椅子もある。文化祭の出し物の相談をしていた時とは空気が一変していた。

何かが、あった……

見回してみても、異状に気づく。

教室の後ろ半分の天井てんじやうが落ちている。上の階からこぼれ落ちてきたのだろう、音楽室の楽器類が転がっていた。

無数のピアノニカ、オルガン。リコーダー。楽譜らしき紙切れも散らばっている。そしてピアノ。

……何か嫌な感覚が走った。

ピアノは片方の足が折れて無残な姿で地に伏している。いくつか抜け落ちた鍵盤けんばんがひどく痛々しい。しかし、それだけではない。何かもつと異質な気配がある。僕はよく目をこらす。誰かが座っている。ピアノの下でうつむきながら正座をしている人がいる。

「ユウタ、見ない方がいい」

テツローの声が聞こえた瞬間、それが誰なのかを僕は理解した。

そして息をのんだ。

ヨウコだった。

高槻洋子……

「お化け屋敷は嫌だわ。だって、怖い私嫌いだもん。いや、いや、違うの！ 確かに私たちがお化け屋敷をやるのなら、私たちは怖がらせる側よ。でも私はそれでも怖いの！ お化けの衣装を準備するだけでも怖い。ねえ、もつとホラ……焼きそば屋とかにしようよ。食べ物だったら美味し

いし、怖くないし……。ねえ、食べ物系にしようよう」

ついでさつき、そう発言して「焼きそば屋」に一票を入れた女の子だ。三つ編みがトレードマークで、おとなしく、ちよつと天然ボケなどところのある可愛い子かわい。そのどこかウサギに似た、ほんわかとした顔。独特の存在感があり、見ていると何だか落ち着くようなタイプ。

それがなぜ、異質なものに感じられたのか。

逆さまだったからだ。

頭が上下逆になって、ヨウコは座っていた。

こちらに背中を向けて。

「……」

声にならない声が僕の口からあふれ出た。目を見開き、口と鼻から赤黒いものを垂たらしているヨウコ。どこか遠くの何かを見ているヨウコ。上からピアノが落下し、彼女の頭に激突したのだ。通常であれば前を向いている首を強引に後ろ側に捻ねじ曲げた。今彼女は生きている人間には決してできない姿勢で、座っている。ピアノに体の一部をめぐりこませながら。

上下逆さまになった顔の両脇で、三つ編みがぶらりと、垂たれ下がっていた。

「テ、テツロー……」

「もう死んでるよ」

テツローは静かな口調で、言った。

「数分前まで、生きてたんだ。いや……生きていたのかどうか、よくわからないな。意識はすでになかったのかもしれない。とにかくちょっと前までは、ぶくぶくと泡を出しながら時々咳のような音をたてていた。だけどそれもなくなり、ついさつき静かになった。静かになってしまった……」

すすり泣く声が響いている。

「助けようと、したんだ。助けようと。でもダメだった。ピアノは動かせなかったし、下手に押すとゴボゴボと嫌な音がしてヨウコの口から血があふれてきてしまう。何もできなかった。何もできないまま、オレたちは……」

自分の脳がぐるんぐると回っているような気がする。胃の奥から吐き気がこみ上げて食道を突き進んでいる。僕は口を押さえてへたり込む。いびつに歪んだ姿勢でヨウコは、どこかを見ていた。僕はその意思の感じられない視線を追い、黒板へとたどり着く。ヨウコはチョークで書かれた「焼きそば屋 一」の文字を見ているのかもしれない。

テツローが僕の背中をさすってくれる。僕は何度かえずいて口を開いた。唾液以外に何も出てこなかった。はあ。はあ。

……胸を押さえながら、何度か大きく深呼吸をする。

「大丈夫かい？ ユウタ」

委員長のマコトが僕の前に座り、目線を合わせてくれる。その優しそうな目がメガネの奥から僕を見つめている。僕は額の汗をぬぐって、小さく頷いた。

今はとんでもなく異常な状況だ。何が何だかわからないけど、とにかく異常なことは間違いない。何が起こってるんだ。何でこんなことになったんだ。わからない。意味がわからない。ここは本当に、さつきまで僕がいた学校なんだろうか。信じられない。……だけどテツローや委員長がいる。見慣れた顔がいる。僕は少し落ち着くことができた。

「一体、何が起きて……」

僕の曖昧な質問に、委員長が返答した。

「僕たちもわからないんだ。ちょうど今、相談していたところだったんだよ」

「わからないって」

「さつき、休憩時間を取っただろう？ 何人かは外に出て行って、残った僕たちは教室の中で雑談をしていた。そうしたら、突然……どん、って振動が走った」

「凄い衝撃だったよな」

テツローが口をはさむ。

「うん。体が突き上げられるような感覚だった。息ができなくなって、腹が押しつけられて、視界がめちゃくちゃに歪んだ。死ぬと思ったよ。死ぬ時はこんな感覚なのかなあってどこか冷静に自分

を観察していたのを覚えている。……そのまま気絶したんだろうね。気がついたら、真っ暗な教室で倒れてた」

「そうだったんだ……」

「ユウタは、どうだったんだ？」

「僕は」

「……どう……だったんだっけ？」

「あんまりよく覚えていないんだ。気がついたら、トイレの床に倒れていた。起き上がって周りを見渡してみると、真っ暗になっていて、窓の向こうが黒い壁に変わっていて……」

「トイレもそうなのか」

教室内にざわめきが広がる。

「教室の窓も全部そうなんだよ。廊下もだ。外が全部岩のような、コンクリートのような硬い何かが変わってしまったている。ごつごつして冷たい壁だ。それに電気もつかない。スイッチを押しても反応しない。だから今頼れる明かりは、非常灯や携帯電話だけだ」

委員長がすらすらと言う。こんな時でも委員長は、頼れる委員長だ。

「最初は隣のビルがこちらに倒れて来て、教室の窓に衝突したのかな、とか考えていたけれど……。トイレもそうだとすると違うね。トイレの外は、校庭のはずだ。そこも岩に塞がれているとすると、

おそろく……」

「委員長、何かわかるのか？」

委員長はメガネの位置を直しながら言う。

「地盤沈下じゃないかな。地震か何かの原因で地面が陥没し、校舎が地面の中に沈み込んでしまった。地中にすっぽり埋まってしまったのなら、窓の向こうがこうなってしまうのも理解できる。電気だって断線して届かないだろう。ただ、こんな規模の地盤沈下は珍しいな。それに学校なんかの施設は、普通は地盤が頑丈なところに建てられるはずなんだけどね」

「……地盤沈下だったら、いいんだけど」

女性の声が委員長の話をさえぎった。

少し釣り目で茶髪の女子。鈴木美音だ。名前はミネだけれど、みんなからはモネと呼ばれていた。とても絵がうまいので、有名な印象派の画家とかけてつけられたあだ名だ。モネは心なしか、青ざめている。

すぐに、モネの横にいる女子に目がいく。その女子は、暗い中でもはっきりわかるほど青白い顔をしていた。さらに何か思いつめたような目で虚空を見つめながら、カタカタと震えている。マオだ。田中真央。その長い黒髪に白い肌、そしてなんとなく暗い雰囲気から男子の間では「魔王」だとか「魔女」だとか呼ばれている子だ。その手には何か妙なものが握られていた。

「ほらっ。もう仕方ないんだから、それみんなに見せな。それがせめてもの罪滅ぼしだよ」
モネに促されて、マオはおそろおそろしたものを差し出した。クラスメイトがいつせいにそれを覗き込むのにつられ、僕も一歩前に出て見る。
なんだよ、それ。

きいろさま

さいてください

たかつき ようこ

きじま まさる

きいろさま

やいてください

たかつき ようこ

きじま まさる

きいろさま

たべてください

たかつき ようこ

きじま まさる

きいろさま

もいでください

たかつき ようこ

きじま まさる

きいろさま

赤黒い色をした布に、黄色の糸で文字が刺繍してある。書かれている文字は、不気味な文言とともに、クラスメイトの高槻洋子と木島勝の名前。高槻洋子の名前を見て、さっきの顔が上下に逆転した姿を思い出してしまふ。

「何だ、これ……」

委員長が布から顔を上げ、マオを見つめて言う。

マオはひつ、と小さな悲鳴を上げると、顔を伏せてめそめそと泣きはじめた。マオと仲の良いアサミが、そばに寄ってなぐさめている。

『黄色さま』のオマジナイだって」

モネが説明する。

「キイロサマ？」

「そう。嫌なことをお願いすると代わりに『黄色さま』がやってくれる、そういうオマジナイみたい。別れてほしい二人の名前を書き込めば二人は別れるし、嫌いな人の名前を書き込めばその人に不幸が起きる。マオはヨウコとマサルが付き合いはじめたのが気に食わなかったから、こんなオマジナイをやったのよ。いや、オマジナイって言うか要するに、呪いね。悪意を持った呪い」

きつ、とモネがマオをにらむ。マオは後ずさりする。何か呟つぶやいているが、小さくて聞き取れない。「何だっけ？ 猫を殺して、その血を染み込ませた布を使うんだっけ。ちなみに事前に、その猫に辛い思いをさせておく。猫が感じた苦痛が大きいほど、名前を書かれた人物に重い災いがふりかかる。そうでしょ」

猫の血と聞いて、布を握っていた委員長が思わず手を離す。赤い布は床にひらりと落ちた。

「変だと思ったのよ。ヨウコがあんな目にあつたのを見て、マオがぶるぶる震えていたから。最初は怖がっているのかと思っただけど、この布を机の下で広げてみたり、落ち着かない様子だった。そう、マオが呪いをかけたのよ。その呪いで、ヨウコは死んだのよ。マオは自分が殺してしまったことが怖くて、震えていたのよ！」

「マオは、悪くないよ！」

マオを慰めていた女子が、モネに対して告げた。国井麻美。くりくりした目がかわいらしい、ク

ラスで一、二を争う美人。そのアサミがマオをかばうように、モネの前に立ちはだかっている。

「マオは、本当に純粹にマサル君のことが好きだったんだから。私は知ってるもん。ずっとずっと好きで、勇気を振り絞って告白したんだよ。それでOKをもらって、マオ、本当にうれしそうだった。でも、マサル君はそんなマオを裏切ったんだよ。告白にOKして二週間後に、ヨウコと付き合いはじめたんだから。マオには何も言わずにだよ。マオがどんなに苦しんだか知ってる？ マサル君はひどいよ。本当に、悪魔のような……」

「マサルを悪く言わないで、アサミ……」

マオが涙声で言う。

「どんな理由があつたって、やっていいことと悪いことがあると思うけどね。呪いとか、ありえないでしょ」

モネが、突っぱねた。

教室が静かになる。室内には険悪な空気が満ちていく。

委員長が口を開いた。

「……でも、それはただのオマジナイだろう。それとこの状況は関係ない。ヨウコがこういうことになったのは残念だけど、ただの偶然じゃないかな。呪いなんて本当に起こりはしないだろう？」

「委員長はそう言うだろうと思っただけだね。マオ、この呪いには注意事項があるんだよね。それ、

みんなにも言っただらうよ」

マオが、促されて震え声で話しはじめた。

「……『黄色さま』は、違う世界にいるの。『黄色さま』が、人を苦しめる時は……ここは別の世界に、人を連れて行くんだ。その時に、呪いをかけた人のそばにいてはいけないっていうルールがあるって……」

マオの話を全員が、聞く。

「なぜなら、そばにいる人も一緒に、別の世界へ連れて行かれてしまうから……」

「そんな、バカな」

委員長が呆れ声で言う。

「じゃあ僕たちはその呪いのせいで、そのキイロサマの世界に連れ込まれたってことになるのかい？ そんなことあるわけないよ。ただの地盤沈下に決まってる。呪いなんて。ありえない」

「私だって、そう思ってたわ……急に土曜にみんな集まるってことになった時、少し不安だった。ヨウコやマサルとまた会ってしまうことになるから。呪いをかけた二人に。呪いの注意事項に違反することになる。でも、そんな……まさか本当に連れて行かれるなんて……そこまで信じてなかったし」

マオが両手で顔をおおう。

「こんなことになるなら、やっぱり今日は来なければよかった……」

そしてかすれた声で、泣きだした。

テツローがため息をつく。

「……そういえばマサルは、どこへ行ったんだろう。委員長、覚えてる？」

「あいつならジュースを買いに行くとか言っていた気が……」

「探しに行った方がいいかもな」

「ちよつと、テツロー……」

僕はテツローを呼びとめて、耳打ちする。

「なんだよ」

「まさか、信じてるの？ 呪いの話」

「いや。何とも言えないな。正直よくわからん。まあどちらにせよ、マサルや他のみんなは探しておかないといけないだろ？」

確かにそれはそうだ。

テツローは自分の携帯電話を取り出すと、照明モードをオンにした。ライトが光り、携帯電話が簡易の懐中電灯になる。

「これでよし、と」

「確かに、探しに行った方がいいね。はぐれてしまわないように、何人かで捜索に行こう。何時に教室に戻るとか決めて」

腰を上げた委員長をテツローが制止する。

「委員長は、ここにいてくれよ。そんなに大勢で行っても仕方ないだろう。それに教室でみんなをまとめる人間も必要だ。三十分くらいで戻ってくるからさ。じゃあ、オレと一緒に行く人、いる？あ、ユウタは強制的に参加な」

「え、強制的なの？」

「嫌そうな顔すんなよ。親友の頼みだろ」

テツローが歯を見せてにやっと笑う。僕に頼みごとをする時のテツローの癖だ。

「わかったよ、しょうがないな」

ふうと息を吐きながら、僕は腰を上げる。でも本音を言えば、嫌な雰囲気が漂うこの教室に留まるよりは、テツローと外に行って少し気を紛らわせたかった。

「じゃ、私も行くわ」

モネが立ち上がり、テツローのそばに並んだ。

「よし。じゃあ三人で、行こう」

テツローはすたすたと歩き出す。

「気をつけてな」

委員長の声に手を上げて応えつつ、僕たちは歩き出した。

●♀■ 西棟一階・体育倉庫

私が目覚めたのは、体育倉庫の中だった。
ううん。

静かなところを探してここに来たのに、何だか騒々しいわ。

私は寝床にしていたマットの上で起き上がる。

体育倉庫の中は雑然としている。最初から雑然としていたかもしれないけれど。埃っぽい。

おや。

倉庫の端、天井が抜けている。上の階から落ちてきたらしいパイプ椅子が床に転がっている。

最初から抜けていた？ そんなはずはない。

まあどうでもいいや。ぼろい倉庫だもの、天井も劣化していたんでしょ。抜けることだってあるわよね。いちいち動揺してなんかいられない。

そろそろ教室に戻らないと怒られるかしら。怒られても別にどうでもいいんだけどね。文化祭の出し物なんて、なんでもいいじゃない。たこ焼き屋かお化け屋敷かを決めるために、わざわざ休日を集まって議論するだなんて理解できない。

……「しをりさんは土曜日は来るよね？」と聞かれた時に、はつきり断っておけばよかった。断り切れずに来るはめになり、結局、退屈でここでサボっている。なんだかバカみたい。断はあ。

私は大きく伸びをした。

もう帰っちゃおうかな。

教室に戻らずに、このまま家に帰っても問題ないんじゃないかな。いや……家に帰るのも嫌なんだけどね。どこか知らない国に行つてしまいたい。憂鬱ゆううつな気分のまま歩き、入り口のドアに手をかける。

がちゃん。

固い手ごたえ。ドアは少しだけ動いたものの、何かにつつかえたように開かない。おかしいな。

がちゃん。

ドアは開かない。

……？

見れば、まっすぐだったはずのドアの枠が、ぐにやりと歪ゆがんでいる。これじゃ開くわけがない。私が寝ている間に何があったのかしら。出られないよ。

あたりを見回してみる。何かが、変だ。どことは言えないが、どこか似て非なる世界に来てしまったような感覚がある。そうだ、まず静かすぎるぞ。もっと風の音だとか、木の葉がこすれる音だとか、あつてもいい。このしんとした静けさ、現実離れしている。それに、そうだよ。何でこんなに暗いんだろう？ 隅にある窓の向こう側は真っ暗だ。

「……」

「……実に暗い。ここは、どこだろう？」

私の後ろで誰かの声が出た。

「暗い。暗い。暗い。光が、足りないね。そう……世界に光がなかった時はこんな状況だったのだろうか。そうだね、こんなに暗かったら創造主も言うだろうね」

何かぶつぶつと呟つぶやきながら、声の主は平均台置き場から立ち上がった。

『光あれ』と」

そいつが手元で何やら操作すると、白い光が体育倉庫に走った。

携帯電話をライトがわりにしたのだろう。まぶしくて、私は顔をそむける。

「おや。誰かと思えば、ええと、転校生の人じゃないか。えーと、名前なんだっけ」

白い光の中、そいつは私に質問した。同じクラスの男子生徒だ。白い肌と、灰色がかった瞳。どこなく現世のことにとらわれない仙人を思わせる雰囲気。雨宮佐久だ。

「……」

私は何も答えず、警戒心いっぱい視線で彼を見つめる。

「ああ、思い出した。しをりさんだね。無口で有名な桐生しをりさんだ。誰かがしをりの『し』はしゃべらないの『し』だって言ってたから、思い出せたよ。それにしても、君まで体育倉庫を昼寝場所にしていたとは知らなかったな」

「失礼ね。別に無口なわけじゃないわ。必要がないことは話さないだけよ。だいたい私だって、あなたがそんなところで本を読んでいたなんて思わなかったわ」

「ん？ これは本じゃないよ」

サクは手にした文庫本サイズの書物を掲げて見せる。

ぱっと開かれたその本の中身は、白紙だった。眉間にしわをよせて覗き込んだ私に、サクは笑いかける。

「この白い世界に何を書こうか、考えていたところだったんだ」

……は？

何だかこの人、変な人だ。かっこつけてるんだろうか。本当に男っていうのは、妙なかっこつけ

をする人が多いわ。こういう人に関わっていると面倒なことになる。私は「ふうん」と、適当な相槌を打った。

「それにしても、このありさまはなんだ？」

サクに促されて、私も倉庫の中を観察する。

大地震でもあったのだろうか。物品は散乱し、ボール入れは横倒しになっている。天井はどこどころ抜け落ち、コンクリートの壁面にはヒビが入っている。

「しをりさんは、何か覚えている？」

私は首を振る。

「何だか騒がしいなと思って目を覚ましたら、こうなっていたのよ。何も覚えてやしないわ」

「まいったな。実は僕もそうなんだ。この白い世界に書くものを探しているうちに、うとうととしてしまっただけ」

「……」

「地震か何かかな。しかし、天井が抜けるくらいだから相当大きな地震のはずだけど。それでも目覚めなかったなんて、僕たちは相当のカンピラだな。それにしても、この暗さは……あれ？」

倉庫の隅に寄ったサクが、窓を見つめてしばらく考え込む。

「……？」

何よ。何があったってのよ。
やがて、サクは笑いだした。

「これは面白い。見てごらんよ、しをりさん。この窓の向こう、壁になっている」
えっ？

どういうこと。

私は眉間にしわをよせる。

「ほら、この窓の向こうは校舎裏の花壇のはずなんだ。だけど壁面が変わってしまったている。なんだろうこれは、妙に湿っているな。水に濡れた岩壁、という感じだ。窓の向こうが全部岩で埋め尽くされているんだ。これは、笑える。なかなか気の利いた演出じゃないか」

サクはそう言つて、くすくすと笑つた。

何なのこの人。全然笑い事じゃないわよ。意味がわからない。

私はあわててマットから飛び降りて、窓にかけよる。闇に向かつて手を伸ばしてみると、手のひらに硬く冷たい感触が走る。本当だ。窓の向こう側が、岩盤のように変わっている。何これ。ばんばんと手で壁を叩いてみる。無情なまでの硬質だけがむなしく私の手に残る。それまで開かれた空間だったはずのもの。私が手を伸ばせばどこまでも受け入れてくれる空間が、私を拒絶する塊に変わっている。気持ちが悪い……

「考えられる仮説はいくつかある。一番面白い仮説が正解であつてほしいね。しをりさん、上に行こう。仮説を検証したい」

何を落ち着いて語りに入っているの、この人は。頭のネジが数千本単位で抜けているんじゃないかしら。

「ほら、この天井の穴から二階に行ける」

サクは何かの機材の上に立つて、天井にあいた穴に首をつっこんでいる。

天井から上ろうつてわけ？

「ここから上に行こう。一層挟んで上が二階なんだから、簡単に行ける。……たぶんあの取っ手の先をこじあげれば、二階のどこかに出るだろう。どちらにしろ倉庫のドアは開かないんだから、ここから出るしかない。僕は先に行く」

サクはひよいひよいと、よじ登つていく。あつという間にその姿が穴の中に消えた。

どうしたものだろう。私が困っていると、上から声がかけられた。

「しをりさん、来たいなら来なよ」

サクは穴から手を差し出した。つかまれ、ということなのだろう。

私はその手をしっかりと握りしめ、天井の穴へとよじ登つた。

サクの手はなめらかで、どこか冷たかった。

「家庭科室だね」

穴から一階の天井裏へと入り、手近な床板をはがして二階へ出る。銀色のシンクと白い作業台が見える。確かに家庭科室だ。

「しをりさん、床にガラスの破片が散らばってる。気をつけて」

サクに引つ張ってもらいながら床下から這い出た。床に置いた手のひらに鋭い痛みが走る。

「いたっ」

「ああ、だから気をつけてって言ったのに」

ガラス片で親指の付け根あたりを切ってしまった。赤い血がじんわりと滲み、つうと垂れる。

「大丈夫……」

傷は浅いようだ。私はその赤を見つめる。なんだか落ちつくわ。他人の血を見たらびっくりしてしまうけど、自分の血を見ると落ちつくのはなぜかしら。ああ、もう表面が薄く固まってきている。出血を防ぐために私の血は、自らを固めて傷口を塞ごうとしている。私が命令したわけでもないのに、なんて健気な。ぺろっと血をなめてみる。生ぬるくて、鉄くさい味が口の中に広がった。

「血って海の水に、少し味が似ているよね。はるか昔に、人間が海を体の中に閉じ込めた名残なのか。ふふ」

「……味はそんなに似てないと思うけど」

「え？ 何か言ったかい。ごめん、聞いてなかった」

お前が話しかけてきたんだろうが、このオタンコナス。にらみつける私に背を向けて、サクは教室の中を歩きまわっている。

「ここも同じだ。窓の向こうは全て、壁になっている。家庭科室は二階だから、ここも壁でつまれているとすると……。いよいよ楽しくなってきたな。これはただごとじゃないぞ。しをりさん、どう思うっ？」

「……」

「本当に無口だねえ。何でもいいから言ってみてよ」

「……地盤沈下で学校が沈んだ、とか」

「ふふふ」

サクが小馬鹿にしたように、笑う。何よ。言えって言ったから言っただけじゃない。何で笑われなきゃならないの。

「地盤沈下ね。なるほど。確かにこのあたりの地盤は比較的弱いという話を聞いたことがある。まあ、ありえなくはないかな。だけど僕の考えは、違う」

「……」

偉そうに。こいつ、なんだかむかつく。

「ここは、地球じゃない」
へっ。

私は思わずぼかんと口を開けていた。予想のはるか斜め上に行く答え。サクは続ける。

「地盤沈下で校舎がすっぽりと埋まる？ 傾きもせず、土砂が入り込むこともなく、校舎が破壊されることもなく？ 出来過ぎだ。ありえない。もっと素敵な解答がある。僕たちは違う世界、違う星に来てしまったんだよ。校舎ごとね。この新しい星は地球とは何もかもが異なっている。大気は岩でできていて、地面とつながっている。僕たちはその岩の中に生きているから、太陽が見えない。必然的に、夜も昼もない。素晴らしい世界じゃないか。僕はずつと地球という星に飽き飽きしていたんだ。僕が生まれた時から大方の秘密おおかたが明らかになっってしまったっている星。秘境もなければ魔境もなく、安全で安心な星。そんなものは願い下げさ。新しく何かを見つけた喜びがないじゃないか。見てごらんよ、この岩だらけの星を！ 未知の世界だ。ここで生きていくことで色んな発見や、カルチャーショックがあるだろう。これこそ僕の求めていた星だよ。僕はこんな星に、生まれたかったんだよ」

何を、言ってるの。

ここが、新しい星？ それこそ無茶苦茶な答えじゃない。

サクは笑顔のまま話し続ける。

「こんな事態を起こしてしまったのは、きつと僕に原因があると思う。僕が強く強く望んだから、こんな現実を引き寄せてしまったんだ。巻き込まれたしをりさんには、本当に申し訳ないと思ってる。でもね、今起きていることをきちんと認めなければならぬ。ここは違う星だよ。僕たちは生まれ変わったんだ」

「何言ってるのよ。あなたこそ現実を認めなさいよ。学校ごと違う星に来るなんてことがあり得るわけじゃないでしょ。SFみたいに、ワープしたとでもいうの？ それこそナンセンスよ」

「ワープしたのか、空間が相転移したのか、世界のあり方が変わったのか。とりあえず、原因はどうでもいいさ。この世にはまだ科学で解明できない現象が数多くあるんだよ。まずは結果を素直に受け止めよう。とにかくここは新しい星なんだ。僕たちはこの新惑星に初めて足を踏み入れた、記念すべき第一世代なんだ。前の世界をエデンの園そとに例えるなら、僕たちはこの星に追放されたんだよ。今までの常識の通じない、異世界にね」

「異世界……」

きらきらと輝くサクの瞳。こりやだめだ。もう、理屈じゃない。彼はそう信じ切っているのだ。どう思う思考回路でそうなるのかさっぱりわからないけれど、とにかく彼の中ではそうなのだ。

「そうだ、いいことを思いついたぞ。この星に名前をつけよう。新しい世界には名前が必要だよ、

何て呼んでいいかわからないからね。何にしようかな。しをりさん、いいアイデアはない？」

バカに付き合っている暇はないわ。

『猿の惑星』は？」

「そうだ、『アメツチ』なんてどうだろう。天と地という意味だけれど、天が岩で覆われていて、地との境目がないこの星にぴったりなんじゃないかな」

何なの？ 私は拳を握りしめる。

ふざけた話題に付き合っつて、アイデアを出してあげたのに……1ミリたりとも聞いていないわ。完全に自分の世界に入っている。

「これでこの白い本に書くことも決まったよ。この星の歴史を書くことにしよう。地球では昔から不満だったんだよね。まっさらな新しい歴史を書けないってことがき。地球にいる限り、『今までの歴史』に書き足す形になっちゃうだろ。そうじゃなくて、世界の成り立ちから、そうそれこそ神話から書き記してみたかったんだ。ぞくぞくする。この白いノートはこの星の聖書になるだろう。歴史的瞬間を、僕たちは今体験しているんだよ！」

そうだねそうだねよかったね。

「しをりさん。どこへ行くんだい？」

アホのあなたに関係ないでしょ。私は家庭科室の扉を開いて廊下に出る。

「ああ、世界のありさまを観察しにくんだね。いい心がけだ。僕も付き合っつてあげるよ、待っつてくれ」

なんで上から目線でしゃべるわけ？

背筋にぞーっと冷たいものが走る。イライラしすぎると、こんな感覚になるのね。新鮮だわ。

暗い廊下を私とサクは歩く。

「しをりさん見てごらんよ、廊下の窓も岩壁で封じられている。やっぱり、外は全て岩で埋め尽くされているんだ」

確かにそれは、あなたの言う通りね。私は心の中で頷く。廊下に並んだ窓はすべて暗黒の壁に変わっていた。廊下を照らすのは非常灯だけ。窓の向こうに空気がないだけで、こんなにも圧迫感を覚えるものなのね。

私は携帯電話を取り出してみる。時刻は15:20。真昼間にもかかわらず、闇につつまれた校舎がひどく不気味に思える。電波は圏外。地盤沈下で地底にいるなら当然か。携帯電話で助けを呼ぶことはできないわけね。

「携帯電話なんて、通じるわけがないさ。ここは別の世界なのだから。古い世界のインフラなど機能するわけがない。しをりさんも、物分かりが悪いね」

無視、無視。

そうだ。屋上へ行ってみたらどうだろう。地盤沈下で下の方の階が沈んでも、屋上は地上に残っているかもしれない。そこから脱出できれば万事解決だ。このアホとも、一緒にいなくてすむ。

「雨宮君」

「サクでいいよ、しをりさん」

「サク、屋上にはどうやって行くの？」

サクは笑う。

「いいセンスだ。上から下まで確認することで、僕の歴史書には壮大な描写が加えられることになる。ぜひ、見に行こう。こっちだよ、ついてきたまえ」

こいつ、ところどころ上から目線なのが実にうっとうしい。

私はサクの後ろについて歩く。華奢なサクの体が、滑るように進んでいく。姿勢がいいのか、それとも体重移動の方法が普通と違うのか。どこか気品に満ちた、不思議な歩き方だった。

「ここが二階で、屋上は四階の上になる。校舎の西のはじにある階段が、屋上まで通じているんだ。他の階段も四階まではつながっているけれど、屋上へ行ける階段は一つだけ。わかるかい」

語尾に「〜かい」とか使うな。

廊下の突き当たり、暗がりを目指し示してサクは言った。

「ここが、その階段だよ」

私は闇を覗き込む。

きん。

何か硬質な空気が顔をなでていく。何だろう、このうすら寒さ。目をこらして見つめるが、その階段はごく普通の階段だった。転校前の学校にも同じような階段があったわ。いわゆる普通の階段よね。にもかかわらず、この違和感は何？

「露が……」

サクが手すりを触って言う。

本当だ。手すりに、露がついている。小さな水の粒が、びっしりと付着している。よく見ればうっすらと霧のようなものが下から漂ってきている。寒い冬の朝に吐く息と、同じような空気が。

「サク……この下の階って」

「この下は、一階。確か講堂のそばにつながっているはずだよ。その横には食堂がある」

「その下は？」

「地下一階みたくになっているところに行く。半地下に倉庫があるんだ」

「倉庫……」

「その倉庫で、階段は行き止まり」

「……」

「屋上に行くんじゃないなかったのかい？」

階段をゆっくりと下りはじめた私に、サクが声をかける。

「一応、見るだけ」

「いいね。それもまた、何か意義のあることに違いない。賛成だ」

私とサクは一步ずつ慎重に足を進める。階段は少し湿っていて、気を抜くと滑ってしまいそうだ。手ずりは気味が悪いほど冷えていて、つかむ手にじんと冷たさが伝わる。漂っている冷気は針のように鋭く、私の鼻や口の中に侵入してくる。進むほど、確実に温度が下がっていくのがよくわかった。

「ここが一階だね」

サクの声が、どこか緊張したものに變化した。一階はとても静かで、何の気配も感じられない。少し雑然としているようだ。下駄箱が倒れ、壁にかけられた絵は落ちてしている。

「ねえサク。あれが、倉庫？」

「……そう、だね」

私は一階からさらに下っている階段の先を見る。

突き当たりにあるドアは開いていた。その向こうで何かきらきらと輝いている。念のため携帯電話のライトで照らしながら、私はドアへと近づいた。

「わあ……」

思わずため息が出る。

その倉庫はかなりの大きさだった。天井が低いものの、床が深い。入ったドアからさらに数メートル下に空間がある。奥行きもかなりのものがあり、二十五メートルプールがまるごと入りそうな感じだった。

そして……足もとから下の空間が全て、水没していた。

不思議な光景だった。青く冷たく輝く水面に、教室にあるものと同じ椅子や机が浮かんでいる。水深はかなり深く、透明度も高いので水中が良く見える。そこには水面に浮かびきれなかった机類が漂っていた。教室が一気に無重力空間になったような錯覚を覚える。

「使わない椅子や机が置いてあるんだよ。入学式で使うパイプ椅子や、演台もね」

サクが、倉庫の補足説明をする。

私はしゃがんで手をのばし、水面に触れる。

「……」

「しをりさん？ 冷たい？」

鋭利な刃物に似た、痛いほどの冷たさ。水面を指が通過する瞬間が、最も冷たい。少しずつ、指を押し入れるにつれて繊細な冷水が皮膚を包んでいく。どこか温かいような気さえする、綺麗な液体。

ぼたり。頭に何かが落ちた。

「天井が、結露している。水滴が落ちてくるよ」

サクの声で見上げれば、天井にびっしりと水玉が並んでいる。水玉は周りの水玉とくっついては大きくなり、重みに耐えられなくなるとぼたつと落ちて、水面に波紋を描く。

ぼたつ。ぼたつ。静かに、それでも着実に。

地下倉庫に降る冷雨。

倉庫の壁面には、不思議な模様が広がっている。青、黄色、赤、白……いくつもの色がマープリングのように混じりあい、溶けあつて、重力に従ってゆっくりと下に垂れたような模様。「A椅子」という文字が元になっているように見える。もともとチョークか何かで書かれていた記号か図が、露によって優しく溶かされ、水彩画のように壁に広がってしまったているのだ。

「……」

「この水はどこから来たんだろうね。しをりさんの地盤沈下説で言うならば、これは地下水ということになるのかな。地中に埋まった校舎の地下倉庫と、地下水路がたまたま繋がったところか。僕はもつといい表現を考えたけれどね。この星……『アメツチ』では、恵みの雨は空からではない、地から来る。こんな言い方はどうだろう。神話的じゃないか」

地下水。

なるほど、地下水か……

サクに言われるまで、地下水という考えが浮かんでこなかった。いや、それだけじゃない。目の前の光景があまりにも綺麗で不思議で、本当に違う星に来てしまったような感覚に包まれていた……

水面を見つめれば、私の顔が映る。しよぼくれた猫のような顔。相変わらずね。その向こう側にいくつもの椅子が沈んでいて、さらにその向こうには底知れぬ深い闇が……。この倉庫がどれくらい深いものなのか知らないけれど、無限に深いように思えた。この世のどこも知れぬ、果てしない遠くから湧き出している泉に思えた。

「どれ」

サクもしゃがみこんで、水を手ですくって口元に近づける。透明な液体が音も立てずにサクの口へと吸い込まれていく。

「冷たくて、埃っぽくて、苦い。とても飲めないな」

サクはにつこり、笑った。

「屋上に向かってみるかい。倉庫ですらこんなありさまなんだから、屋上へ行けばもっと凄いものが見られるかもしれないよ」

凄いものって。冗談じゃないわ。屋上に行つて救助を呼びたいのよ、私は。

……だけど、サクの言葉で少しだけわくわくしている私がいる。本当に、違う星だったら……
面白いかもしれない。
そんなことを考えている私が、いる。

■ 東棟三階・廊下

「まず、渡り廊下脇の自動販売機から見に行くか」
テツローの声に、僕とモネが頷く。

ジュースの自動販売機は校舎の各階に設置されている。ただ、それぞれ売られているジュースの種類が微妙に異なっていた。僕たちはマサルを探すために、自動販売機をしらみつぶしに探していくことに決めたのだ。最も近い自動販売機に向かって、僕たちは歩き出す。

「本当に、どの窓も壁が変わってしまっているのね」

モネが言う。廊下横の窓は全て岩壁で封じられていた。

「外が見えないだけで凄（すご）い閉塞感だよなあ。廊下がいつもよりずっと狭く感じる」
ため息をつくテツロー。

「『黄色さま』、か……」

僕はテツローに聞く。

「で、結局テツローは、あれ信じてるの？」

「あれって何だよ」

「さっき言ってた呪いの話だよ。『黄色さま』ってやつ」

「あー、あれなあ……いや、オレは信じてないよ。呪いなんて全く信じていない。けど、他に何か合理的な説明ができるかって言われても、できないしなあ。それで説明がつくんだったら、信じざるを得ないかもしれないな。でも今のところ他に原因がありそうだと思うてる。地震とか、災害とか。とりあえず状況を探るのが、先だと思っぜ」

いつも冷静なテツローらしい回答だ。僕は頷（うなづ）いてから、モネに話を振る。

「モネは、どう思う？」

「私？ そうね……」

モネは細くて長い指を、顎（あご）に当てて考えこむ。

「私は、呪いもあると思うわ」

「へえ」

ニッコリ笑って、モネは続ける。

「私、結構オカルトなものって信じるのよ。絵を描いているからかもしれないわね。絵を描いていると、時々明らかに自分の実力を超えた作品が完成することがあるわけ。何だろう？　こんなものを描こうとは全然考えていなかったのに、描けてしまった、なんてことが。そんな時、私は完成した絵の前で思うの。これは誰かが私に乗り移って、描いたんだなど。さっきまでの私には、違う誰かが入っていた。人智を超えた力がこの世の中にはあるのよ。そして人間には、そんな『力』を呼び出す能力があると思うわけ」

すらすらと話すモネ。美術コンテストで何度も入賞している彼女が言うのと、説得力があった。モネの絵は僕も見ることがある。下描きもせずすらすらと複雑な構図をキャンパスの上に描き出していく。僕がその手の動きに見入っていると、じきに絵が出来上がってしまうのだ。そうして完成した絵は、ただ上手いというだけでなくどこか神秘的なものがあり、ただただ感心する他なかった。「人間の想いの力は、凄いことを引き起こすことができる。そう私は考えているの。何だろう……：そんな非日常なことじゃなくて。例えば唐揚げが食べたい！　って強く強く思っていると、それが晩御飯のおかずに出たりする。私は、そういう時、心が何かを引き寄せたような気がするの。唐揚げをおかずに選んだのはママの気まぐれなんだけど、私の気持ちにママの気持ちに何か小さな影響を与えたような気がする。逆もあるよね。例えば付き合ったばかりの彼とデートしていて、今日だけは絶対知り合いには会いたくない……：そんな時に限って、パパにばったり会っちゃったりする。

私は、それも自分の心が引き起こしたことに思えるわけ。『こんなことがあつたら嫌だな……』とかちらつと考えてしまつて、『いや、そんなことあるわけない。そんなこと考えていて、本当になつちやつたらどうするの』って否定する。できるだけ気にしないようにするんだけど、それ自体が気にしていることになつてるんだよね。繰り返しているうちに、心の中で最悪のケースをどんどん育ててしまつて、結果、現実として引き起こしてしまう。本来の望みとは逆に、パパを引き寄せてしまふ……」

「ふうん、面白い考え方だな。でも何となく、わかる気もする」
テツローが感心する。

「今回も、その延長線上の話のように思えるのよ」

「今回って、この『黄色さま』の呪いが？」

「そう」

モネは小さく頷き、続ける。

「マオはマサルに裏切られた。想いがかなつて喜んでいたのに、マサルはヨウコとも付き合つたんだから。あのマオだよ。真面目で、弱気で、内向的で……：思い込んだら強く強く考えてしまひそうでしょ。マオは相当悩んだと思う。苦しんだと思う。そしてやつぱり、マサルとヨウコを憎んだと思ふよ。死ねとも考えただろうね。マオのことだから、『死ね、だなんてひどいことを考えちゃだめ』っ

てな風に、時々自省しながらね。でも結果的に、そうやってぐるぐる考え込むことで思いがどんどん強くなっていく……」

僕はマオの思いつめたような瞳を思い出して、うすら寒くなる。

「あの呪い。『黄色さま』だっけ。あの形式なんて、どうでもいいのよ。ああいうオマジナイってどこの学校にも、数えきれないくらいあるでしょ。あれは形だけ。触媒になっただけ。問題は、マオが深く深く悩んでいたことと、マオが呪いを信じやすいタチだったってことなのよ。マオはあのオマジナイを知り、強い恨みを込めて呪ったんでしょね。そして、『呪いが実現されてしまえばいいのに』という希望と、『まさか、こんなこと起こらないよね。起こらないで欲しい……』という不安を胸に秘め続けていた。その二重の思いが、結果的にとんでもないことを『引き寄せた』のよ」

モネの目は真剣だった。僕は聞く。

「それで、こんなことになったって言うのかい。僕たち全員も巻き込んで」

「……そうよ」

「マオが強く思い込んだだけで、これだけのことが引き起こされたと？」

「そうよ。何度も言わせないで」

モネはきつぱりと言い切った。

「……」

そんなことがあり得るだろうか。一人の女子高生のオマジナイ、『黄色さま』の呪いだけで校舎が黒い岩壁に埋まってしまわなくて。モネの言う話はなんとなくわからなくもない。でも、でも、やっぱり僕は、信じられなかった。とても現実に取り得ることだなんて思えなかった。

話しながら歩いているうちに、廊下の角が近づいてくる。角を曲がって少し歩いた所に小さな休憩スペースがあり、自動販売機が置かれている。

「……何だか、変な音がしないか」

テツローが声を出す。モネが眉をひそめて言う。

「ほんとだ。何？ ガスカしら」

僕も耳をかしげる。

しゅう……しゅう……

本当だ。確かに何かガスのようなものが、漏れ出る音が聞こえてくる。休憩スペースの方からだ。「何この音……。こんな音、聞いたことないわ」

「なんかあれだな、入浴剤に似てないか？ ほら、お風呂に入れるブクブクするやつ。あれ入れると、こんな音がした気がする。特に、いっぺんに大量に入れるとすごい音するんだよ」

「テツロー、いっぺんに大量に入れたことあるの？」

「あるよ」

「……そう」

僕たちは慎重に足を進める。しゅうしゅうという音は、だんだんと大きくなる。でもそんなに大きな音じゃない。周りが静かだからよく聞こえるけれど、足音よりずっと小さな音だ。ふつふつと、何か小さなものが弾けるような音も聞こえる。

「何この匂い」

モネが眉をひそめる。

「うわっ」

テツローも、思わず鼻を押さえる。

進む先から異様な匂い。甘い。甘い匂い。とてつもなく甘ったるい匂いが休憩スペースから漂ってくる。

「くそっ、一体なんなんだよ！」

テツローがライトの光を掲げた。休憩スペースがさっと照らし出される。

マサルがいた。

マサルがこっちを見ていた。

「うそ……」

モネが、絶句する。

二台の自動販売機。片方が倒れこみ、マサルの後頭部を押しつぶしている。挟みこまれた状態のマサルは、ぼんやりした表情のまま動かない。美男子のマサルは、そんな状態でもどこか絵になった。首が少し曲がっているようだ。おそらく自動販売機が倒れこんだ際に骨を折られ、そのまま息絶えたのだろう。自動販売機たちに左右から支えられて、マサルは死してお立ちつくしていた。長身でスマートなマサルのその姿は、陳列されたマネキンのようにも見える。

自動販売機は倒れた際に故障したのか、ジュースの缶を大量に吐きだしていた。レモン味の炭酸飲料水。いくつかの缶の中身は溢れ出し、休憩スペースには黄色の液体が満ちている。炭酸はしゅうしゅうと音を立てて少しずつ空中に溶けていく。甘いレモンの香り。マサルはジュースを買おうとしていたんだろう。彼の財布は黄色の水面に落ち、お金は散乱してしまっている。炭酸飲料水の泉に沈んだ硬貨たちには二酸化炭素の細かな泡が付着して、まるで魚の卵が産みつけられたかのようだ。紙幣はレモン水漬。僕たちにとって威厳ある存在だった千円札が、海藻のように頼りなく揺らめいている。

「マサル！ おい！」

茫然としている僕を押しつけ、テツローがマサルに駆け寄る。ばしゃばしゃと黄色い水が飛び散り、泡がしゅうしゅうと音を立てる。

テツローが近づいても、マサルには何の反応もない。眼球は固定され虚空を見つめている。

「大丈夫か、おい！ 今助けてやるぞ」

テツローがマサルの腕をつかむと、マサルを支えていたバランスが崩れた。あつと言う間もなくマサルは糸の切れた人形のようによろめき、黄色の液体の中に崩れ落ちた。

「マサル……」

水面に波紋が伝わっていく。それにあわせて鮮やかに泡が立ち上り、しゅうしゅうと盛大に音を立てた。まるで炭酸水がマサルのことを、歓迎しているかのように。

「マサル……」

「黄色……『黄色さま』だわ」

「黄色つて……まさかこのジューズが？ 『黄色さま』の呪いだからってことか？ そんなことが、

あるわけが……」

「……」

テツローも、モネも、僕も黙りこくった。呪いなんてあるわけがない、そう声に出して言いたいのだが。マサルの死にざまはあまりにも鮮烈だった。ひよっとして、本当に『黄色さま』が、『黄色さま』という何かわけのわからないものが、いるんじゃないか？

そんな気持ちが僕たちの中に漂っていた。言い知れぬ不安が、満ちていた。

「おかえり。……どうだった？」

教室に戻ると、委員長が僕たちに聞いた。

他のみんなも、僕たちの周りに集まってくる。

「あれ。少し人増えた？」

テツローが聞く。

「ああ。ゴリたちが戻ってきたんだ」

委員長が指し示すと、ゴリが「よっ」と手を上げてみせた。片手にはコンビニのビニール袋を三つ、提げている。テツローがゴリの肩をぼんぼんと叩いて言う。

「何、ゴリ。コンビニ行つたの？」

「ああ。お菓子があつたほうが会議も進むと思つたからさ」

ゴリが開いて見せた袋の中には、ポテトチップスやチョコレートなど、様々な菓子が詰まっていた。「すげえ量だな。クラスのために買ってくるなんて、さすがゴリ。優しいねえ」

ゴリこと大山卓也は、クラス一の巨漢である。柔道部のエースである彼は、そのごつい体格からゴリというあだ名をつけられていた。しかし、あだ名に似合わず優しい性格で、クラスメイトからは慕われている。

「テツロー、オレの功績も忘れないでくれよ」

ゴリの後ろから、ヒヨロが顔を出した。

「お金を出したのはオレだからな。ゴリのやつ、プロテインの買いすぎでお金ないっていうからさ。会計の時、財布に札が入ってないなんて、ビックリだよ」

そう言うヒヨロは、特徴的な高い声でへへへと笑った。ヒヨロこと高原比呂は小柄で細身、ゴリとは正反対の体格である。親が金持ちで、クラス一のおぼっちゃんだ。その金銭感覚は僕たちとは全く違う。千円が彼にとつては十円くらいに見えているようだ。本人に悪気はないものの、彼の発言は時として嫌味っぽく聞こえてしまう。

見ればヒヨロのすぐ横にアサミが寄り添っている。二人は手をつないでいるようだ。

「おお、ヒヨロ。悪い悪い。ゴリがでかくて見えなかったよ。ありがとな。クラスのお財布として、君は実に便利な存在だよ。ふふふ」

「テツロー、オレに金以外の存在価値がないみたいじゃないか」

テツローとヒヨロは笑う。

「それにしても、お前らこんな時までいちゃいちゃするんだな……」

テツローの発言に、アサミが少しムツとして言い返す。

「こんなときだから、比呂君のそばにいないと不安なの」

「比呂君って……」

「おいおいアサミ、みんなの前だから少し自重しろよ」

「……比呂君がそう言うなら……アサミ、我慢する」

アサミは素直にヒヨロの手を離れた。しかし、それ以上離れることはなくそばに立ったまま、アサミとヒヨロは見つめ合う。

テツローは僕の方を向くと、何とも言えないステキな笑顔をした。僕も苦笑で返す。クラス公認のバカップルは、こんな状況でも相変わらずのようだ。

「もういいや。バカップルは勝手にしてて」

「失礼ね。バカなんて」

「じゃあアホップル」

「テツロー君！」

「それにしてもゴリ、こんな状況の中よく外に出られたね」

ほっぺたを膨らませるアサミを無視して、テツローはゴリに話しかける。

「いや、オレたちが外に行ったのは結構前だよ。コンビニから戻ってきて、学校の玄関に入ったんだ。そうしたら、地震かな。凄い衝撃があつてさ。オレたち、気を失つてたみたいなんだよ。気がついたらこんな状況だろ。とにかく教室に行けばみんながいると思って、ヒヨロと一緒に戻って来たんだ」

「なるほどな。玄関も、こんな風に外が塞がれているのか？」

「うん。外は完全に塞がれてた。オレがついさつき入ってきた入り口が黒い壁に変わってて、驚いたよ。玄関横の階段を上ってこまで来たけれど、途中で見た窓は全部そうだったな」

「ゴリ、あの壁押してみた？」

「押してみたよ」

「マジで！ で、どうだった？」

「びくともしない。軋むような手ごたえもないんだ。よっぽど硬いのか、よっぽど分厚い壁なんだと思うけど……」

「ゴリの力でも無理か。ゴリならひよっと思っただが」

「ちよつとあれは、普通の壁じゃないな。岩山が立ち塞がっているみたいだった」

「なるほどね」

「テッローたちは、マサルを探しに行ってたんだって？ 委員長から聞いたよ」

「ああ、そうだよ」

「で、マサルは見つかったのかい」

「……」

「マサルは死んでたわ」

黙りこんだテッローの代わりにモネが答える。

「えっ」

「黄色い炭酸飲料の池の真ん中で、倒れた自動販売機に首の骨を折られてた。事故死ね」

「……」

沈黙が広がる。

「自動販売機っていうと、この階の休憩スペースでか？」

委員長の質問に、モネは黙って頷く。

「黄色……っ？」

マオがひきつった声を出す。

「黄色の、炭酸飲料って？」

マオに向き直ってモネが答える。

「自動販売機が壊れて、缶ジュースが出てきちゃってたのよ。で、そのうちのいくつかはつぶれて中身がぶちまけられてたわけ。それがたまたまレモンのジュースだったの」

「それって、本当に偶然なの……っ？」

「知らないわよ、そんなの」

「だって、呪いは」

「あなたがかけた呪いでしょ！」

「……」

『黄色さま』の呪いは、あなたがかけたんでしょ！ そうよ、そうかもしれないわ。『黄色さま』が何なのか私は知らないけど、自動販売機の飲料の中であえて黄色のジュースを選んだのは、『黄色さま』かもしれないわよ」

「……もってかれた……マサルが、『黄色さま』にもってかれた……」

「変な声出して震えてないで、何とかしなさいよ！ 『黄色さま』の呪いを解除するなり、何なりできないの？ あなたが悪いのよ！ 私たちを元の世界に戻しなさいよ」

モネがマオの胸倉をつかんで、叫ぶ。

『黄色さま』……」

マオは怯えきった表情で、脱力する。

「私の質問に答えなさいよ！」

「やめろ、落ち着け。二人とも、今喧嘩したって仕方ないだろう。マオを放すんだ、モネ」
テツローが間に入ってとりなす。

モネは不愉快そうにマオを放すと、ため息をついて壁に寄りかかった。
教室の中に沈黙が満ちる。

「みんな、少し状況を整理しよう」

委員長が口を開く。

「とにかく、今わかっていることをきちんと理解しなくちゃいけない。僕がこれから順番に整理していくから、間違っていたら指摘してくれ。まず僕たちは今、学校もろとも黒い壁に閉じ込められている。理由はわからない。この黒い壁が何なのかもわからない。何となく手触りから、岩のようなイメージがあるだけ。そして、少なくとも玄関を含めた三階まではこの岩壁に埋められている。そうだよ、ゴリ？」

「ああ、オレが見てきた限りではそうだった。全部くまなく見たわけじゃないけど」

「テツローたちが休憩スペースまで見に行った時も、窓は全部黒い壁で覆われてた？」

「そうだね。非常灯以外の明かりは見えなかったぜ」

「なるほど。となると、それ以外の場所がどうなっているかはわからないね。本当に脱出できるところがないのか調べる必要がある。例えば四階、あとは屋上。西棟がどうなっているかもわからない」
僕は聞く。

「西棟って？」

「ここが東棟だろ。西棟は渡り廊下の向こう側だよ。理科室とかある方」

「あ、なるほど」

「探検しなくちゃならない。それだけじゃない。みんなも探さなきゃならない。ここにいるのは、ええと」

委員長は一人一人指さして、手早く人数を勘定かんじょうしていく。

ゴリ、テツロー、モネ、マオ、アサミ、ヒヨロ、僕、そして委員長。

「八人。マサルとヨウコを含めれば十人だ。今日来た人数は十三人だから、あと三人足りない。えつと……雨宮佐久と、福田一樹と、桐生しをりの三人か。みんな校内のどこかにいるはずなんだ。マサルのように事故に巻き込まれている可能性もある。場合によっては、一刻も早く助けに向かう必要があるかも……」

テツローが頷うなずく。

「自動販売機も倒れていたし、ガラスが割れているところもあった。事故の可能性はあるな。まだ教室に戻ってきていないやつらは、何かあったと考えるもおかしくない」

「うん。脱出口を探すのと一緒に、できるだけ探した方がいい。ただ……一番問題なのは脱出口が存在しなかった場合だよ」

委員長の言葉に、全員がぐくりと唾つばを飲む。

「つまり、全部が岩壁に覆われてしまっていた場合。それが『黄色さま』の世界に連れてこられたからなのか、地盤沈下のためなのかどうかはわからないけれど」

最悪の可能性だ。だけど、誰も「そんなわけがない」とは言わなかった。みんなただ黙りこくっていた。うつすらと、「その可能性も十分あり得る。いや、おそらくそうなんじゃないか……」と感じていたのかもしれない。

「出口がなかったら、僕たちは助けがくるまでここで生き延びなければならぬ。必要なものがたくさんある。食料、水……なあ、ユウタ」

いきなり僕の名前が呼ばれた。

「えっ。何？」

「ユウタはトイレで倒れていて、教室まで来たんだっただよ。水道は、出ていた？」

水道……

僕は目覚めた時のことを思い出そうとする。水道。どうなっていただろうか。窓の向こうが真っ暗になっていたことが衝撃的すぎて、水道のことなんて覚えていない。洗面台のガラスが割れていたような気がする。だけど、水道は……

「ごめん、覚えていない」

委員長が少し笑う。

「ユウタ、手を洗わなかったんだね」

「仕方ないだろ。それどころじゃなかったよ」

「まあそうだよね。少なくとも、蛇口が壊れて、水が噴き出しているということはなかった？」

「うん。それはなかった」

「なるほど。ありがとう」

「委員長。水道が、止まるんじゃないかってことだよな？」

テツローが言う。

「そうだね。現に、電気は止まっている。断線したのかもしれない。確かうちの学校では加圧ポンプを使っているから、電気が止まると水は出ないはずなんだよね。水道管が切断されていたら、もちろん出ないし」

「ふむ。どこかに非常用の水とか、備蓄されてるんじゃないか？」

「そうだね。あるはずだ。あとは自動販売機の中に入っている缶も飲料になる。どこに水があるのかちゃんと調べて、量を把握したいな。これだけの人数だから、計画的に使っていかないと危険だと思う。同じ理由で、食料も探したいところ。そうだね、あてにできそうな食料といえば」

「ゴリのお菓子」

「うん。それが一つ」

「あとは、水と同じように非常用の備蓄がどこかにあるだろう。乾パンみたいな。オレ、先生に言われて運ばされた記憶あるもん。それから……食堂には食い物があるんじゃないかな」

「そうだね。食堂にはありそうだ」

「おし」

テツローが立ち上がる。

「そうとなれば委員長、さっそく探検をはじめたほうがいいんじゃないか？」

「うん。よし、二班にわかれよう。そうだな。テツロー、ユウタ、ヒヨロ、モネでA班。A班は屋上、四階、三階を調査してくれ。ゴリ、アサミ、マオ、僕でB班だ。B班は二階、一階、体育館を調べよう」

「え。比呂君と違う班？」

アサミが不平を言う。

「お前ら、一緒だと真面目に仕事しねーだろ。委員長の人選、妥当だと思うぜ」

テツローが笑いながらヒヨロの背中を叩く。

「B班のリーダーは僕。A班のリーダーは、テツロー、君にお願いしてもいいかな」

「ああ、いいぜ。委員長のご指名とあらば」

「えええ……なんか、不公平……」

小さな声でアサミが言うが、委員長は取り合わない。

「調査する内容は、今整理した通りだ。脱出できる場所、クラスメイト、水、食料。発見したもの

はノートか何かに記録していくといいかもしれないね。音楽室の床が抜けているように、他にも崩れている床があるかもしれない。探索は十分注意してやってくれ」

「なあ委員長、集合場所ってまた教室にすんの？」

「ん？ そのつもりだけど。なぜだい、テツロー」

「あんまりここを拠点にするのってよくないと思うんだよね。落ち着かないしさ。ヨウコもずっとみんなに見られて嫌だろうし。食料とかを運び込むんなら、もう少しスペースがあった方がいいだろう？ 講堂とか、拠点にしたらどうかね」

「確かに。でもそれだと、はぐれてて教室に戻ってくる人がいたら……」

「黒板に書いておけばいいじゃないか。『講堂にみんないるから、これを見たら講堂に来てください』ってね」

「確かに、そうだね。そうしようか」

「決まりだな」

「よし、じゃあ集合場所は講堂。そうだね、二時間くらいたったたら講堂に集合することになろうか。さあ、みんな行動開始だ」

委員長の呼びかけで、みんなが立ち上がる。

茫然^{ぼうぜん}としている者、不満そうな者。様々な者がいるが、気持ちは同じだった。

——このままここにいても仕方ない。

非日常がはじまっていくのを肌で感じながら、僕もゆっくりと立ち上がった。

委員長とテツローはお互いの腕時計を見せあい、時間を合わせる。集合時間を確認すると、A班とB班は別れ、それぞれに歩き出した。

「ユウタ。一緒の班だね」

モネが話しかけてくる。

「うん」

「ちょっとさ、内緒話しない？」

「えっ？」

どういふこと。

「大丈夫。テツローとヒョロは、二人で話してるみたいだから。小さな声で話せば、彼らには聞かえないわよ」

テツローたちは、僕たちの数メートル前の廊下を歩いていた。携帯電話の明かりであたりを照らしながら、お互いに何か話している。

「確かに、聞こえなさそうだね」

「でしょ」

「で。内緒話って?」

モネは、僕にひときわ近づいて言う。

「私ね、聞いたのよ。マオに、『黄色さま』の呪いについて、もっと詳しく」

「うん」

『黄色さま』の呪いをする、下手したら一緒に『黄色さま』の世界に連れて行かれてしまうって話はもうしたでしょう。そういう場合の、解呪の方法があるらしいのよ。呪いの知識ってのはたいてい、解除する方法とセットになるもの。マオもそれを知ってたわ」

「そうなんだ。だったらなんで、解呪をしなかったんだ?」

方法があるのならそれを試してみればいい。それによって事態が解決すればもうけものだ。

「それはね……」

モネはもう一度テツローたちの様子を見てから、僕に向きなおる。

「その方法が、とんでもない内容だからよ。私もマオにさんざん詰め寄って、やっと聞けたわ。それも、私にきちんと説明しないと、みんなにあることないことぶちまけてひどい目にあわせるぞって言って、やっとよ。半ば脅迫よ」

さらっと言ってのけるモネ。半ば脅迫。恐ろしい行いをするものだ。女子の考えることはすさま

じ。

「へえ。とんでもない内容って?」

「……生贄を捧げることよ」

「えっ」

非現実的な単語に、僕は思わず息をのむ。

生贄?

『黄色さま』はね、人間を食べる神様なんだって。『黄色さま』の呪いは、そんな『黄色さま』に餌を与える儀式。『黄色さま』は飢えている。人間を食べたくて飢えている。だから人間を異世界に引きずり込んで、食い殺す。……ってことは、『黄色さま』をお腹いっぱいにしてあげればいいのか。満足したら『黄色さま』は、帰って行く」

「まさか」

「そう。『黄色さま』を鎮めるためには、人間を生贄に捧げて満腹にさせればいいんだって」

「そんなバカな」

「そして『黄色さま』への生贄の捧げ方は、簡単。人間を殺してその体を黄色く塗ればいいの。全部塗る必要はない。体のどこかに、黄色で印をつければいい。『黄色さま』は目が悪くて黄色しか見えないんだって。だから『黄色さま』の生贄に捧げることが示すには黄色を使えばいいの。わか

る？ 要はこの呪いを解除するには、人を殺して死体を黄色く塗ればいいのよ。何人分なのかは知らないけど、『黄色さま』が満腹になるまで。そうすれば『黄色さま』は帰って行って、取り込まれた人間たちは元の世界に戻るんだって」

なんておぞましい。

僕は少し吐き気を覚えた。相手を殺す呪い。そして、それを解呪するにはさらに人間の命を捧げなくてはならないなんて。呪い自体にも、そんな呪いの仕組みを知っていて実行したマオにも、嫌悪感を覚える。悪趣味だ。悪趣味すぎる。それにしても、こんな解呪の仕組みをなぜモネは僕に伝えたのだろうか。まさか。

「……まさか、モネはそれを信じているわけじゃないよね？」

僕は聞く。モネの目がくりつと動く。

「信じているって、どういうこと？」

「……生贄いけにえを実行しようと思ってるわけじゃないよね？」

「ああ、私はそこまで考えてはいないわ。私は結構中立なの。呪いを完全に否定もしないし、完全に肯定もしない。本当かどうかもわからないことを簡単に信じて、人を殺したりだなんてしないわ」

「そ、そうだよな」

モネは少し笑う。それに合わせて僕も微笑ほほえむ。

「でもね、他のみんなが私と同じかどうかは、わからない」

自分の表情が凍こおっていくのがわかる。

モネの言った意味を、よく考える。いや、よく考えるまでもない。モネは言っているのだ。解呪の方法を信じて、実行するやつがいるかもしれないと。

「そんな……」

自分のために誰かを殺す。実行するやつがいるだろうか？ それも、クラスメイトの中に。だいたい呪いなんて非科学的なものだ。裏付けはない。本当にそれで解決する保証なんかない。そんな不確かな理由で、誰かを殺すだなんて考えられない。

僕の動揺に構わず、モネは淡々と続ける。

「私ね、マサルは事故死じゃないと思うわ」

「どういうことだよ？」

殺人だっというのか。

「ねえ、よく考えてみて。マサルは自動販売機に挟まれてたわよね。でも自動販売機って、そんなに簡単に倒れるものかしら。そりゃあ、ただ立ってるだけなら倒れるかもしれないけれど。うちの学校って、自動販売機に転倒防止の金具がついてるのよ。ピアノとかも固定できるやつだから、それが倒れるなんてちょっと考えにくい。あの金具があっても自動販売機が倒れるほどの地震だった

としたら、校内はもつと凄^{すご}いありさまになってるはず。私、おかしいと思っただけ」
「……」

「だから、確認したの。いい？ よく聞いて。マサルの首を折った自動販売機の転倒防止金具は、外されてたわ。あの金具はネジを回すと、簡単に外せるのね。でも自然には取れない。明らかに人間が、ネジを回して外したのよ」

「ど？」

「誰かがイタズラで外しただけかもしれないし、そもそもつけ忘れたままになってたのかもしれないけど。もしかしたら、マサルが休憩^{まひゅうけい}スペースにいるのを知っていて、転倒防止の金具を外して……後ろから倒した人間が、いたのかもしれない」

モネの目は真剣だった。

「そんな。それって」

「そう。殺人よ」

「まさか、そんな」

僕の言葉を、モネはさえぎる。

「あり得なくはないわ。だって、『黄色さま』なのよ。『黄色さま』のことを信じてしまっている人間の中には、本気で呪いを解除するために人殺しをするやつだって、いるかもしれない。あの象徴

的な情景を見たでしょ？ 黄色のジュースに浸されてた。あんな偶然ってあり得る？ 自販機から

缶が飛び出たとしても、意外と中身って出ないわよ。出たとしても、レモンジュースだけがたまたま出るなんてちよつと出来過ぎてる。あれは偶然に見せかけて、誰かがやったんじゃないかしら」

「でも、誰がやるんだよ」

「そこなのよね。私は一番怪しいのは、マオだと思ってるんだけど。やりかねないでしょ？ 彼女一番呪いとか信じてそうだし。でもね、マオは私たちが探索に行くまで、ずっと私たちと一緒にいたのよ。犯行の時間なんてなかったはず。もう一人怪しいのは、アサミかな。アサミも『黄色さま』の呪いの解呪方法を知っていたのよ。まあ、アサミもマオと同じでずっと私たちと一緒にいたんだけどさ」

「ずっと一緒にいたってことは、完全にアリバイがあるじゃないか。なら容疑者なんていないだろ？」
「そんなことないわ。地震があった後は、教室にいたみんなも全員気を失っていた。その中で、少し早く目覚めた誰かがマサルを殺して、みんなが目覚める前に戻ってきたのかもしれない。こう考えれば、マオもアサミも容疑者よ。それから、マオに共犯者がいるケースもあるわよ。実は一緒に呪いをかけていて、呪いの仕組みも理解している者がいるのかもしれない。そしてこの状況を察して、さっそく生贄^{いけにえ}を捧げはじめたやつが、ね。教室に後からやってきた人たちはみんな共犯者の可能性がある。もしくは、まだ見つからない人かもしれないけど」

「そんなことを言うなら、全員怪しいじゃないか」

「そうよ。はっきり言って全員怪しいわ」

「そんな……」

後から教室に来た、ゴリやヒョロがマサルを殺した？ いや、あれは二人一緒だったから違うかな。でも、殺したのが二人組じゃないという証拠もどこにもない。もしくは、他のクラスメイトがやったのかもしれない。そいつはどこかに隠れて、次の生贄いけにえを探している……元の世界に帰るために？ 嫌だ、そんなこと考えたくもない。ありえない。否定したい。

だったら、僕は自動販売機が倒れたのが偶然だと信じたい。完全なる事故だと信じることに賭けたい。

僕の青ざめた表情を見て、モネが続けた。

「ユウタ、わかっているだろうけど、この話は秘密だよ」

「う？ うん」

『黄色さま』の呪いの仕組みを知ったら、自分だけは生き残ろうとして誰かを生贄いけにえに捧げようとするアホが出てこないとも限らない。こんな極限状態だからね。そうでなくとも、無駄なパニックを引き起こすかもしれない。だから下手に教えちゃダメなんだ」

「そんな話を、なぜ僕に？」

モネは僕を見つめて、言う。

「そうね……何となく、ユウタは呪いを信じないだろうし、パニックにもならないって思ったの。何だか落ちついてるもの。それに、マサルを殺した犯人でもないと感じたの。ユウタはそんなことしない。何か、そういうタイプじゃない」

「落ちついてるかなあ……今話を聞いて、結構動揺してるんだけど」

「ああ、そうなの？ まあ、いいわ。とにかくユウタになら話してもいいかと思って思ったわけ。いい？ ユウタ、それとなく周りの人を観察しましょう。殺人犯がこの中にいるって決まったわけじゃないけど、警戒しておいたほうがいいわ。私一人で注意するよりも、ユウタと二人で注意したほうが犯人を見つけれられる可能性は高い。そしてあなたも私も、殺されたくはない。そうでしょ？」

僕は頷く。

モネは唇の前に人差し指をつけると、にこっと笑った。

「内緒話は終わり。行きましょう」

歩き出すモネ。

僕はその後ろを、追いかける。

足音が闇の中でやけに大きく響いた。